

山本一清と三五教沼津香貫山天文台

沼津市 渡邊美和 WATANABE Yoshikazu

§ 1.はじめに

1957(昭和 32)年、沼津市香貫山(かぬきやま)の山頂付近に天守閣を模した天文台が忽然と姿を現した。

この天文台は、三五教(あなない教と読む)という宗教団体が建設した。そして、この天文台設立の学術的バックボーンとなったのが、山本一清(やまもと いっせい)であった。

筆者はこの天文台(後に「月光天文台」と改称)のあった香貫山の麓で育った。長じた後、各地で天文台の様子を見聞きし、改めて月光天文台の特異性にも気づいた。そして、多くの人たちがこの月光天文台と山本一清の関係にいろいろな思いを抱いていることを知った。

地元沼津では当初から宗教団体による建設に懸念があった。そして、天文台の市民に対する寄与があまり感じられないまま、その後、山頂の市有地の土地貸借等の問題から、この香貫山の天文台は 1973(昭和 48)年に撤去された。後に静岡県田方郡函南町に移転し現在に続いているが、香貫山には遺構しか残されていない。

山本一清の功績についての体系的な研究は、京都大学で「天文台アーカイブプロジェクト報告会」による議論や資料再収集そして解析などを通じて行われている。だが、沼津の香貫山にあった天文台と山本一清との関係解明は未着手で、明らかになっていない点も多い。山本一清の三五教との関係が、それまでの天文啓発活動とは、違和感を生じさせてもいたが、それが山本の主宰する東亜天文学会の運営で大きな問題とならなかったのは、そのカリスマ性に起因すると見られる。なお、沼津に留まらない、その後の月光天文台を中心とした三五教系天文台ネットワークについても、いつしか関係者の口碑の中に埋もれてしまっている。

本稿では、沼津市の地元メディアの報道を基に、それにインタビューや関連資料から、香貫山天文台の完成までの経緯を整理し、疑問の解明を進めてみたい。なお、当時の沼津市のメディア、「沼津朝日新聞」や「黎明新聞」の記事についてその掲載日や紙名などを以下に情報源として記載している。また、主に、1956(昭和 31)年～1957(同 32)年について抽出作業を行った。そして、筆者が持っていた疑問点とは次の事項である。

1. 三五教はどのように香貫山天文台を建設したか
2. 山本一清と三五教の接点は何だったか
3. なぜ沼津が天文台立地として選ばれたのか
4. 香貫山天文台、そして後の三五教系天文台の多くが城郭構造を模したのはなぜか
5. 三五教系列天文台の目指しそして果たした役割は何だったのか
6. 山本一清と三五教の両者が相互に求めた役割は何だったのか

§ 2.山本一清とは

山本一清は、1889(明治 22)年に滋賀県栗太郡上田上(かみたなかみ)村(現大津市内)に生まれた。膳所中学校から第三高等学校に進学、その後京都帝国大学卒業後に同大学院に進み、京都帝国大学助手・講師・助教授を経て 1925(大正 14)年に教授に就任すると共に理学博士号を取得、専攻は天体力学である。この間、当時の水沢緯度観測所(現国立天文台水沢観測所)嘱託を務め、欧米へも留学している。更に、プロアマ連携観測の推進やそのための普及を目的に、1920 年に大学内に「天文同好会」を立ち上げている。これが現在の NPO 東亜天文学会と呼ばれる全国規模のアマチュア天文研究者主体の団体となって続いている。その後、京都帝国大学の宇宙物理学教室花山(かざん)天文台設立に際して初代天文台長に就任し、望遠鏡の輸入設置に尽力し



写真 1 山本一清(1957 年)

つつ、並行して機関誌「天界」の発行に努めた。花山天文台は東海道新幹線で京都市山科付近からもよく見える。山本一清は、その後、1938(昭和 13)年、学内問題の齟齬などにより京都帝国大学を依願退職。郷里の上田上村に戻って田上天文台を興し研究普及活動を行った。京都帝国大学時代から、各地の天文台建設にも係わってきている。倉敷天文台の設立に尽力し、現在の国立愛生園ハンセン病療養所での天文台建設案にも携わっている。

戦後は、一時、上田上村村長も務めながら、山本天文台(1955 年・昭和 30 年に田上天文台から改称)で天文研究者や望遠鏡開発者の育成に努め、多くの人材を輩出した。山本一清自身は敬虔なクリスチャンであり、1959(昭和 34)年に故郷で逝去された。

§ 3. 三五教とは

三五教とは、「(第二次世界大)戦前は終末論的思想を基に世直しの必要性を訴え、政府から危険団体と見なされ弾圧を受け」(*1)た神道系の大本教から「分派し、教団設立当初から大本の神道的な世界観を徹底した教義を展開した」「財団法人国際宗教研究所の調査によれば、三五教は『宇宙創成から現在地上万物にいたる諸活動を八百万神と称え』『死後の世界を信じることによって、先祖を祀った敬神崇祖の宗教観こそが日本民族精神の源流であり、日本神道の神髄である』という世界観に基づき、布教活動を行っている。」(*1)とされている。大本教からは「生長の家」「世界救世教」なども分れている。

三五教自体は 1949(昭和 24)年、中野與之助を創始者として当時の静岡県清水市で設立された(2014 年現在、静岡県掛川市に移転)。中野は、1887(明治 20)年に静岡県焼津で生まれ、1921(大正 10)年に大本教に入信。1935(昭和 10)年の第二次大本事件では幹部の一人として逮捕され(*1)、その際に京都府山科の思想犯刑務所に留置されたい。その際、「山科から見える京都帝国大学の花山天文台に親しみをもった」(*2)との話しも伝わっている。

無罪で釈放された後に清水出身の霊学者、長沢雄楯から同人が学んだ本田霊学の継承を要請され、「清水で三五教を立ち上げた。当初から海外布教に力を入れ、同時に国際交流事業を推進。昭和三十六(1961)年には中野を総裁として『精神文化国際機構』を発足させる。以後、アジア各国への開発技術指導員の派遣や、研修生の受け入れなど、活発な国際協力活動を展開してきた。現在も『公益財団法人オイスカ』として活動中で、近年はインド、パプアニューギニア、モンゴルなど協力支援地域を拡大している。」(*1)

新宗教は、幕末に生まれた金光教や天理教なども含み、その累計は「少なくとも数千にのぼる。しかし、現在活動していることが確認されるのは数百程度」(*3)とされている。1951 年に公布された宗教法人法により認可制がとられたことで宗教法人の数は急増した。「現代につぼん新宗教百科」に取り上げられた 92 団体の設立なり立教と呼ばれている年次を 10 年単位で見えてみると、少なくとも現在に続いている新宗教は、1940~1959 の間が大きなウェイトを占めている。三五教もこの流れに沿って設立されたことが分かる。

2011 年現在の同教信者数は 9,558 人(*1)、新宗教といわれる中でも小さい。現在の動向ははっきりしないものの、一時は静岡県浜松市に中野地学専門学校を運営するなど、天文教育に力を入れていた宗教でもある。

§ 4. 当時の社会情勢と沼津

表 1 にこの天文台が建設された 1957(昭和 32)年前後の主な社会情勢を掲げた。

日米安全保障条約の改定を 1960 年に控え、政治的にも激動の時代であった。労働争議も大きなエネルギーを持っていた。戦後体制の確立とその後の我が国の方向付けがなされると共に、経済成長に向けての産業基盤整備が推進され始めた頃でもある。経済白書が高らかに「もはや戦後ではない」と宣言したのは 1956(昭和 31)年だが、本質はそれと裏腹に戦後の国としての体制立て直しが緒につきはじめたばかりである。

社会文化的には、「太陽の季節」の青春群像がこの時代を象徴している。戦後という一時代からの脱却がシンボライズされていた。1959(昭和 34)年の皇太子殿下御成婚を機に家庭への導入が進んだテレビ文化もこの頃始まっている。一方で電話の家庭への爆発的普及も

表 1. 1954～59(昭和 29～34)年の社会情勢

年	月	事 象	年	月	事 象
1954年 (S29)	2	造船疑獄事件	1957年 (S32)	7	国際地球観測年開始
	3	ビキニ水爆実験で第五福竜丸被爆		3	EEC(ECの前身)発足
	4	第一回全日本自動車ショー		8	ソ連、ICBM発射実験成功
	9	洞爺丸台風、死者行方不明者1,698人		10	ソ連、人工衛星打上げに成功
1955年 (S30)	4	バンドンでアジアアフリカ会議開催	1958年 (S33)	1	米国、人工衛星打上げに成功
	8	現ソニー、トランジスタラジオ発売		8	中国、農村人民公社化決議
	8	ひ素ミルク事件表面化		9	狩野川台風、死者行方不明者1,157人
	9	日本、GATT加盟		11	東海道線、特急こだま運転開始
	11	保守合同、55年体制開始 この年後半から神武景気		11	東京タワー完工 この年インスタントラーメン発売
1956年 (S31)	1	石原慎太郎、「太陽の季節」で芥川賞	1959年 (S34)	1	メートル法施行
	3	日本住宅公団、入居者募集開始		4	皇太子殿下御成婚
	5	水俣病、公式確認		9	伊勢湾台風、死者行方不明者5,101人
	8	経済白書、「もはや戦後ではない」		12	三井三池争議はじまる
	10	ハンガリー事件、ソ連軍介入			この年後半から岩戸景気

出典：歴史学研究会編、岩波書店刊、「新版日本史年表」1984.6

控えていた。交通面でも、1964(昭和 39)年の東海道新幹線開通を前に整備が進んでいた。

マイナス面も顕在化しつつあった。公害の発生も認識され始めた時期だったのだ。まだ災害対策整備も進んでいないことから、多くの天災に係る犠牲者を生じたのもこの時期の特徴である。

地方自治という観点からは、1947(昭和 22)年の地方自治法の公布による地方分権化の促進で、それまでの中央集権的な体制とは異なる文化の創造も始まりつつあった。任命制だった首長が直接選挙に変わり、議会の選挙も改革されたが、そのあり方の模索はまだ続いていた。義務教育の拡充は大きな財政的負担を生じ、地方の中でも過疎と集中が始まった。

そして、忘れてならないのは国際地球観測年である。戦後、世界の科学の動向から隔絶されていた日本が、その間の遅れはかなり大きかったが、再び世界と対等な形で向き合うことのできる大きな契機となった。

沼津もこのような情勢と無縁ではない。加えて、この時期の独自の背景もあった。それは、地元選出代議士の首相就任や国体開催に伴う行幸啓である。病気のために早期退陣を余儀なくされたものの、地元選出の代議士である石橋湛山が首相に就任したのは1956(昭和 31)年 12 月。前後も含めて沼津からの唯一の総理大臣である。日本としては、その後に高度成長期を迎えることになるが、当時の沼津に楽観的な高揚感が存在していた。その沼津に、とある宗教団体から計画が持ち込まれた。その中に天文台が含まれていた。

§ 5.天文台建設計画

1956(昭和 31)年 10 月に初めて山本一清が三五教関係者の訪問を受けたことが後の新聞コラムの中に登場している。そして 1956(昭和 31)年 12 月 13 日の沼津朝日の記事の中に初めて天文台建設のアイディアが掲載されている。天文台の開所は翌 1957(昭和 32)年 9 月であり、建設計画発表からわずか 9 か月でオープンに至っている。

当時の沼津には、おそらくは宗教団体が提案し賛同者も得た 2 つの箱物プロジェクト、その一つは大正天皇妃であった貞明皇后を巡る記念館建設、もう一つは天文台建設があった。そして、沼津の地域開発と関係した団地開発、更に、当時の国鉄幹部が絡んだと見られる交通殉難者慰霊塔建立の四つプロジェクトが持ち込まれ、又は、検討の俎上にあった。これらが香貫山の総合開発計画とあいまって提唱されたのだ。この内、「貞明皇后記念館」は、沼津と皇室との関係からもたらされたものと見られる。実際、沼津には 1953(昭和 28)年に「貞明皇后記念碑」も建立されている。これら施設を中心とした香貫山全体の遊園地化計画もあったとのことだが、同山塊の岩石の風化が甚だしく地盤がもろいことなどから、最終的には見送られている。これらは当時の沼津市議会の論議を巻き起こす。まだ揺籃期

であった民主的自治も、それ以前の中央集権的な地方自治体質とのせめぎ合いの中で、手続きの不鮮明さなど表しつつ審議が行われ、結局、貞明皇后記念館建設と交通殉難者慰霊塔建立は立ち消えとなった。「なぜ沼津で、何を記念するか」という妥当性の問題からと思われ、その意義が受け入れられなかったとみられる。なお、この塔建立は、後の1965(昭和40)年に形を代えて、沼津市の戦没者追悼のための慰霊塔として、香貫山中腹の香陵台という地に建立されている。



写真2. 現在の戦没者慰霊塔

その中で、天文台計画は、当時の日本でも吹聴され周知されていた「国際地球観測年への対応」という大義名分を有していた。今にしてみれば、同じ宗教団体がバックにいた貞明皇后記念館建設は、いわば、当て馬に近いものだったのかもしれない。

§6. 香貫山の選定

前節でみたように、三五教は現在に至るまで静岡県と関係している。信者も多かったことも予想される。また、現月光天文台には、現在の沼津市内である旧田方郡西浦村木負に三五教の中野開祖の別荘があり、そこから見る沼津の香貫山の地が開祖により既に知られていたとの情報も伝わっている。また、沼津の地方紙を手繰ることで、当時の地元の名士ともいえる仲介者の存在も浮かびあがった。確認はとれないものの、三五教と沼津を結びつけたと想像するに難くない。

一方、山本一清は沼津選定について次のように語っている(以下、” / ” は記事中の改行を示す)。「以前からあの山の良さは知っていました。(昭和31年12月)二十五日の下見でも、今度(昭和32年1月)の再調査によっても高さや山の形が充分です。だゞ水をどうして調達するかが問題です。 / 箱根に近いから気象的にまずいということは全くありません。相当はなれているし、当地が南西にあたるからです。風が強くないかということはずい分心配しました(中略)一般人にも見せたいと思つています。また景色が良いところですから地上をながめる別の施設も考えています。とにかく場所がよいことには関東第一です。」(黎明新聞記事、「香貫山天文台 山本博士ら再調査」、1957.1.8)

一方、三五教は、「当初鹿児島、岡山、静岡を候補地として選んだが、静岡県の沼津が交通の便が良く、天体観測によいので選んだ。レンズにホコリがたからない、町の光の関係、西南に開けていなければならないという見地から最適の土地で敷地三百坪を申請してある。」(黎明新聞記事、「代表者の語る香貫山天文台」、1957.2.3)と述べ、選定の理由を示している。

それでは、山本一清は沼津をどのように知っていたのであろうか。なぜ「以前からあの山の良さは知つてい」たのだろうか。これを解く鍵は、敬虔なクリスチャンであった山本一清と、当時から同じ滋賀県内で著名だったヴォーリズとの交流だ。クリスチャンとしてのYMCA 夏季学校が現在の静岡県御殿場市のYMCA 東山荘を会場として続いていて、そこにヴォーリズと山本一清は共に参加し交流を深めていた。山本一清はもともと滋賀県の膳所中学校時代に同校で英語を教えていたヴォーリズと知り合っていて、その後、何回かの御殿場訪問が判明している(*4)。ヴォーリズは近江兄弟社の創始者であり、建築家で、プロテスタントの伝道師でもあった。一般的にはメンソレータムの販売元として近江兄弟社が知られている。山本一清も、御殿場に行く際には沼津を通ったであろう。道すがら、沼津駅付近からは香貫山はよく見えるのである。

§7. 香貫山天文台の建設

香貫山天文台の建設までの経緯を地元新聞の記事から再掲して時系列で組み立て直すと表2のようになる。現月光天文台には、当時の三五教信者による労働奉仕の貢献も大きか

表 2. 香貫山天文台建設略史

年	(S)	月	日	事項
1956	31	10		山本一清、静岡県から中野与之助氏一行の訪問を受ける。
	31	12		貞明記念館と天文台建設事業案初出
	31	12	25	山本一清、某氏紹介で市長訪問、香貫山への天文台建設を申入れ
1957	32	1	6	天文台関連権威者24人来沼、現地視察
	32	1	6	貞明記念館と天文台、事業最高責任者来沼、経過報告と方針明言
	32	1	6	香貫山天文台、山本一清博士、再調査で水を懸念
	32	1	17	市議会で貞明記念館・天文台、三五教との関連質疑
	32	2	2	市議会、天文台・慰霊塔とも双方山頂建設へ審議
	32	2	2	市議会総務経済委、内藤電話局長・三五教中野氏、東大長谷川一郎氏・京大古川喜一郎氏を呼び説明を受ける（肩書、氏名ママ）
	32	2	24	天体観測の当り年、東亜天文学会長谷川一郎氏の計算が世界的にも正確、一日も早く天文台ほしい(黎明新聞記事)
	32	2	28	市議会で鉄道受難者慰霊塔・天文台の土地貸与確認
	32	3	10?	三五教天文台、整地作業着手
	32	3	18	三五教天文台、18日に地鎮祭
	32	3	18	香貫山天文台地鎮祭、台長は山本一清氏博士、名称は「三五中央天文台」
	32	4	7	建設地に深さ八尺、地表からの高さ十五尺のコンクリートピラー打込
	32	4	14	天文台建設地に山本博士ら8人、14日から泊まり込みで彗星観測
	32	5	21	香貫山山頂天文台、山本一清博士臨席のもと上棟式
	32	9		22-23日に天文台完成を祝し沼津市商店街連盟、天文祭り開催予定
	32	9		大望遠鏡据付け既に着手、20日作業完了予定、22日開所式予定
	32	9		香貫山頂へ水道敷設、9月24日天文台竣工式までには利用可能予定
	32	9	19	天文祭り舞台建設取り掛かり、商工会議所前旧松坂屋跡広場
	32	9	19	城のような威風堂々たる天文台、インフラ設置も要請(コラム)
	32	9		市有地無断使用、無視された中止命令
	32	9	21	香貫山天文台、9月21日開所式予定、21-22に商店街と共同で天文台祭計画
	32	9		考えさせられる市助成金 天文祭りに10万円
	32	9		賑わった連休、天文台へもハイカー
	32	9	21	多少の紆余曲折はあったものの、人気わく天文台
	32	9	24	香貫天文台、24日竣工披露
	32	9	25	香貫山天文台、9月25日落成式

出典：沼津朝日新聞・黎明新聞等から記事を抽出して筆者による要約

ったと伝わっている(石垣に用いた石を信者が麓から運び上げたとも伝わっている、余談ではあるが、現在残っている石垣の石は現地のものでなく海又は川の丸い石である)。

ここで明らかになったことは以下のような点である。

①当時、名称として「三五教中央天文台」ではなく、「三五中央天文台」が用いられていた。「教」の一字が付されていないことは、名称を巡っての宗教側と山本一清側との確執もうかがわれる。報道では「香貫山天文台」という名称が目立つ。山本一清は天文台開設を伝える東亜天文学会の機関紙「天界」第 390 号の表紙写真で、「沼津の香貫山上の中央天文台」と呼んで紹介している。ただし英文では「A View of the Ananaian Central Observatory, Numazu」(*5)となっていて、「三五」の名称付加に躊躇も感じられる。

現月光天文台の資料によれば、中央天文台から月光天文台に改称されたのは 1958 年(昭和 33 年 1 月)(*6)とのことだ。「月光天文台」という呼称のルーツは不明だが、同じ頃的事象などから由来として考えられるものとしては、1)天体写真にも多く用いられた三菱製紙の印画紙「月光」(1950 年発売開始)、2) 戦前に滋賀県大津市にあった実業家藤井善助の別邸「月光亭」内に建設した天文台(*7)などがある。このほか、当時、人気を誇った「月光仮面」のテレビ放映が開始されたのも同じ 1958 年である。案外、藤井天文台の「月光」亭が「月

光天文台」という呼称のルーツかもしれない。

②コンクリートピラーは地中深さ 2.6m、地上高さ 5.0m程であった。報道では「巾五尺」と記載され「巾」の意が頂部なのか底部の意なのかは不明。また、「このコンクリート台は最初中を空洞にしてフンドウをつり下げる予定だったが、これを変更し、全部中までコンクリートでかためることになったもの。」(黎明新聞、1957.4.7)とも報道され、当初の計画の運転時計としての重錘とその位置構造が窺えるが、計画のやや杜撰さも見て取れる。

③総予算は 1 億円との記録がある。ほぼ全額が三五教によりの出資と見られる。なお、当時の大卒国家公務員の初任給は 1957 年で 9,200 円(六級職)、2013 年で 181,200 円(総合職) (いずれも人事院「国家公務員の初任給の変遷(行政職俸給表(一)による)」で、これを基に現在の価値に置き換えると 20 億円程度となるか。ただし、詳細なコスト明細は不明であり、或いは信者の労働奉仕が多かったことも伝えられていて、実際のキャッシュでの支出は限定されたものであったかもしれない。いずれにせよ、宗教の集金力の大きさに驚かされる。

④宗教団体が建設するとのことで、建設計画が浮かび上がった当初から沼津市議会でも懸念が生じていた。早くも当時の沼津朝日は、前日の市議会での様子を沼津市長の答弁として次のように報じている。「香貫山天文台は天文学の泰斗山本博士が、国際的天文台を香貫山に建設したいとの話があり、実地調査も行った 山本博士と三五教(アナナイ教)とは深い関係を持ち、三五教が一切の費用をもつかわりに、三五教中央天文台として建設したいと申出があつた。三五教の名を冠せたくないと思い、話し合つたがどうしても三五教の名をつけることが第一条件で、他にも日本平(注; 当時の静岡県清水市)や多くの候補地があるから、これが駄目なら見込みないような話になつている。(中略)三五教と名称はつけるが、形式上は三五教との契約にはならないと思う。また宗教団体でも有償ならば土地を貸しても(地方自治法では)かまわない」(沼津朝日、1957.1.18)

⑤1957 年 9 月の「市有地無断使用、無視された中止命令」は、沼津朝日が伝えたもので詳細記事の要約は次の通り。

「香貫山市有地 391 坪に建設中の天文台の完成式に先立ち、三五教では天文台へつながる道路と参観者展望兼休憩室、便所を建設する計画を立て、9 月 6 日付けで市に対して周辺の 419 坪の借用申請を出した。この広さは市長決裁で可能だが、市としては市議会協議会にはかって処理する準備を進めていたところ、三五教側で 9 月 6 日夜から工事に着手していることを 7 日に監視人が発見。市では中止命令を出すとともに、始末書、誓約書を取った。しかし、工事は約束を無視して続けられ、19 日までには大半が建設されてしまった。三五教側では参観者が多いことから早急に作ることを指示したのに対して、工事に当たっていた信者が市の規則など考慮にいれずそのまま鵜呑みにして行つたと言われる。市では 19 日に再び工事中止命令を出し、20 日には三五教幹部を本部に招いて話し合うことになっている」(沼津朝日、「市有地を無断使用・三五教が香貫山蹂躪」、1957.9.20)

その後、この処理はあいまいな内に終わったかのように思えるが、これが後に月光天文台の沼津香貫山から函南町への移転への下敷きになっているとも見られる。

⑥「天文まつり」という言葉の初見は 1957(昭和 32)年 8 月 21 日に「沼津朝日」が伝えた「観光と天体の観測 商連と共同で天文台祭り計画」という記事である。「商連」とは沼津商店街連盟の略である。「天文まつり」は、もともと、香貫山天文台側のオープニングイベントが沼津商店街とタイアップしたものであったことが分かる。なぜ商店街が積極さを見せたかの事情も当時の地元報道から推察可能である。それは、恒例となっていた、沼津の夏まつりの中の大きなイベントである花火大会が不手際から限定されたものとなり、「期待した商店街をがっかりさせた」(沼津朝日 1957.8.4)のである。市長改選による実行委員会の

混乱、大イベントである花火が当年は仕掛け花火に限られ、道端から見られる打ち上げ花火が行われなかったこと、結果として花火以外の出し物も少なく、「商店街の夏がれ対策と市民のリクレーションという本筋をはなれて『夏まつり』の名前がなく(注；「泣く」の意)」(沼津朝日 1957.8.3)の事態となった。

天文まつりの計画を、沼津朝日紙面では次のように詳報している。「同天文台では観光にも一役買うことになつているので開所祝賀祭りを商店街と共同で(九月)二十一、二日に行いたいと意向をもっており商連では近く役員会を開いて提携について協議する。/(中略)実現すれば夏枯れ対策としての風変りな観光まつりとなろう」(沼津朝日 1957.8.21)。更に、「商連常任理事会は二十二日午後一時から商工会議所で開き、九月二十二日行われる香貫山天文台の開所式に協賛、商連主催で天文まつりを行うことになった。成績により恒例行事か、夏まつりに繰り入れも考えられている」(沼津朝日 1957.8.24)と報じた。

ただ、前述の香貫山天文台の市有地無断使用の問題が露見した 1957 年 9 月 20 日の沼津朝日の報道では、これと併せて、天文まつりに市が十万円を助成金としての支出することを問題視し、市長の「商連からの申請に基づきこれまでの振興例に従ったもの」という答弁に対して「予算三十四万円」の「中心は神事で埋められ、三五教の信者千名余も参加するといわれているので、表面は天文祭りだが、実質は三五教の祭典であり、一宗教団体の神事に市が助成金を出す結果ともなるので、憲法違反のおそれもあると、批判の声がある」(沼津朝日 1957.9.20)と報じている。

⑥落成当時の香貫山天文台には 46cm カルバー望遠鏡が搬入され据えつけられた。これはもともと山本一清の個人天文台である滋賀県の山本天文台のもので、あくまで仮のものであった。当初の計画については、山本一清自身が以下のように述べている。「もともと、8 メートル平方の大観測室は、口径 30



写真 3. 全国的な会議も香貫山天文台で開催されていた
(1971 年第 12 回流星観測者会議)

センチの国産第一の屈折望遠鏡のために設計されたものであるが、この機種が完成するまでには少なくとも約一年を要する予想であるため、しばらく反射望遠鏡を山本天文台より移して此の室に据え付けたものである」「来年の末(注；1953 年のことか?)には、予定の屈折機がここに据え付けられるので、その後は、大反射鏡がそれ自体に適合した第 2 観測室に移されて全能率を発揮することが期待」(*8)とされているが、この計画は達成されなかった。

この 30cm 屈折望遠鏡については、設計運営に携わった坂井義雄によれば「(天文台)屋体が完成近くになっても、教団側から望遠鏡発注に関しては通報のないままに建設物は完成近くになっていたのであって、30 糎屈折は五藤光学にするというのが山本先生から僕は指示されていたのであるが、発注されないままに完成祝賀の日程だけが通報されて来ていたのであった。山本先生は、この現状に、僕達以上に心痛されておられたのであった。/ 暫時『田上天文台より 46 糎を移す。』そして完成式を済すということで、まったく山本先生の御好意によって開所式の面目は保もたれたのであった。中央天文台のドームスリットの原因は、明らかに 30 糎屈折赤道儀の便宜に重点が置かれている。だから 46 糎カルバー反射赤道儀では北天観測には不向きであった。」(*9)とされている。

また、山本一清自身の記録(*8)によれば、香貫山天文台開設当時の設備としては、前述の口径 46cm 反射赤道儀のほか、これに同架されていた 10cm と 6cm の屈折望遠鏡、15cm 反射鏡をガイドスコープとしたシュミット光学系の 21cm 天体写真儀、更に、7cm 移動用屈



折望遠鏡(経緯台とみられる)、10cm 双眼鏡があったとされる。

写真4 完成当時の天文台 天界第390号の表紙写真

写真7と比べるとこぢんまりとしていて、比較すると屋根の位置が90度違い、回転機構もわかる。

§8.城郭を模した天文台

残された写真からは、香貫山天文台が城郭建築を模した建物であったことがわかる。一見すると不思議な形態である。誰がデザインしたのか不詳であるが、山本一清自身が上部回転屋根の意匠を決めたと見られる。だが、本来は通常の回転式ドームを設置する予定であったらしい。その経過について地元のローカル紙「黎明新聞」は次のように報じている。

「香貫山天文台の最初の計画は純日本風の三層楼の上に世界のどこの天文台でもやっているようなドーム型の観測室を設ける予定にしていたところ、それではあまりにまねばかりしているようで気がきかないし、それに背景として他に比類のない富士の霊峰と美しい自然を生かさないのはいかにも惜しいことだということで、山本一清博士は急にその構想をかえた破天荒の計画を進めることゝなった。それは同天文台の主軸となる建物を純日本式の”三層の天守閣”にして天体観測室にあてようというものである。しかもこの天守閣は東西南北何れへでも、自由自在にぐるぐる廻るようにし、”廻る天守閣”という全く世界のどこにも類例のない新しい装置で、その窓にとりつけた望遠鏡によつて天体観測をしようというものである。」(黎明新聞、1957.2.22)

この香貫山天文台の様式について、山本一清は完成を知らせる東亜天文学会の機関紙「天界」に以下のような「城と天文台」と題した文を寄せている。

「こんど沼津の香貫山上に建てられた中央天文台の本館は、三層楼の天守閣を模したものであって、富士山や駿河湾、箱根天城の山々の景観とマッチして、珍しい美観を呈し、沼津(否、東海)の一名所となりつつあり、地元の人のみならず、列車中の旅客たちも楽しませている。/(中略)/ そもそも昭和の城というのは大坂の新城建築にその端を発する一種の流行であるが、当時私は大坂の二三有力者に城を天文台にでも利用して、新しい文化的利用法を示唆したこともあったが、こちらの意が通じなかったものか、遂に大阪天文台城は実現しなかった。図らずも今般落成した沼津城は最初からの計画の通り、天文台として、単なる懐古趣味以上に、積極的に将来の新文化活動の一中心としてデビューするわけで、ひいて”城”というものの新しい用途を示すものとなろう。」(*10) 当初から天守閣スタイルの回転ドームが計画されていたか否かについては、沼津ローカル紙が伝える記事と山本一清の天界上での表明とは齟齬が見られる。

山本一清が述べているように、この時期に各地で城の再建(正確には天守閣又は櫓の復興とでもいうべきか)が続いている。沼津香貫山天文台が完成した1957(昭和32)年は、全国各地で城の復興建築が行われていた時期だった。香貫山天文台がこのような動向と無関係であったとは考えにくい。また、山本一清は、「世の中の天文台と同じでは気が利かない」と述べているが、新聞記事に見られる予定変更には事情の存在も窺える。

天文台建設に当たっては、現在の月光天文台に「建設したのは九州の建築屋」(*11)と伝わっている。おそらくは三五教の信者と考えられ、そのような施工者にとって、直径5mもの回転ドームそのものが難しかったのではないかと想像される。更に、山本一清は前例としての経験を有していた。それが山本天文台の土蔵の上に回転式屋根を設置した観測室である。切妻屋根が回転する形式や、しっくい固めた壁との調和など、山本天文台と香



写真 5 .山本天文台観測棟

貫山天文台は非常に類似して見える。なによりもその屋根が回転するのである。

後に山本一清が建設に直接に関与したと見られるもう一例である三五教東北天文台では、天守閣形式の屋根回転型ではなく、通常の回転式ドームが採用されている。この点も沼津香貫山天文台の建設に当たって、「何らかの事情」で天守閣屋根回転型を選ばざるを得なかった裏付けとなるかもしれない。

この城郭建築を模した天文台の出現は地元ではどのように受け止められたのであろう。沼津朝日は、「香貫山」というコラムを掲載して、天文台に対する住民の反応を伝えている。「香貫山に天文台が出来た。私たち山麓住民にとっては、商店街の人達以上に喜ばしい。 / (中略) / 「あれは城ですか?」—そういう質問を、私たちはよく受ける。それほど威風堂々たる天文台だ。特に点灯した夜の姿は、また格別である。」(沼津朝日、1957.9.19)

おおむね好評である。昭和 30 年代の沼津市民には、天文台の何たるかはあまり認識されていなかったであろうし、いわゆる天文台の白いドームにもなじみがあったわけではなかった。城のように、まだしも身近に感じられるような建物が親しみを増したのであろう。前述したように各地で城の再興ブームが起きていた。そのような情勢の中で、かつて城が確かに存在しながらその跡地がほぼ全く残されていない沼津の事情も、この城の形の天文台を歓迎する方向に向けられたのではないかと思われる。

なお、この城郭を模した天文台は、後に三五教が日本各地に天文台を建設した際にも、その統一的なモチーフとして用いられた。1958 年 4 月に福島県二本松市に開設された奥州天文台も回転天守閣を伴う木造三階建てであった(*12)。天守閣を模した回転屋根と共に城の意匠としての破風構造なども見られる。宗教は時として、奇抜にも見える行事や制度を伴っている。それにより信者の一体感や信教への導入が支えられる。たとえば、高校生の甲子園の野球を目指す宗教団体は多いし、阿含宗の「星まつり」も広く知られたイベントとなっている。もともとの構想を誰が描いたかは不明だが、統一的な城郭を模した天文台のネットワークは、三五教にとってうってつけの宗教効果をアピールするテーマだったと見られるのである。

§ 9. 香貫山天文台と三五教

当時、山本一清は以下のように三五教との関係を述べている。

「去年(注；1956 年・昭和 31 年か?)十月の或る日、静岡県から中野与之助氏一行の訪問を受けた。中野氏は、戦後に、わが国で興隆して来た三五教の開祖であつて、清水市に総本部をもち、全国の幾万の信者を教化指導される人である。氏は宇宙観に立脚する平和思想を宣伝され、(中略)天文思想を基盤とした宗教運動を理想として居られる。今回の来訪の目的は、宗団の内外に於ける天文思想や、人生宇宙感の研究と普及のため協力を求められるためであつて、氏の深い思想と進歩的な構想とを聴くことを得て大に感銘した。 / (中略) もともと天文学は「思想」の学である。幾千年の昔、バビロニアに起つた天文学は、要するに一つの宗教であつた。 / (中略) 従つてこれら先哲の天文学を近代の天文技術者たちが真に理解し得ないのは当然であると言わねばならぬ。 / 第十九世紀の初頭から、天文学の主流は物理学や工学を駆使しつつ、漸次に思想よりも技術に移つて来た。従つて天文学者としての見識は失われて今は既に一技師たるの自覚に堕しつつある。昔は学会の先頭に立つて世の思想を指導していた天文家が、今は数物理学者の後尾に附し、或は物理学者の徒輩として漸くその存在の意義を認められているという状況は貴き伝統を冒瀆するものである。 / 自分は現代の天文学のこうした傾向を苦々しく思つていた一人である。しかるに図らずも中野開祖の言説に触れ、ここに年来の不満の中から一道の光明を認めると共に今日の天文界に新しい道を開く決心した次第である。(以下略)」(黎明新聞コラム「天文と思想」、

1957.2.26)

山本一清の、天文台開設が近い高揚感にあふれた時期のコラムであり、割り引いて考慮すべきことではあるが、当時の天文学の潮流に対しての鬱屈感も感じられる。山本一清の考える本来的な天文学への回帰が三五教の天の思想とマッチングしたのであろうか。

なお、山本一清は 1956(昭和 31)1 月、滋賀県上田上の山本天文台が発行していた月刊「星と空」に「これからは余分の生涯(所感)」という記事を寄せ、以下のように述べている。以下の文章からは、この時点では後の沼津の天文台計画を認識していないことが推定される。

「現在の私は予想以外に健康である。そして 1956 年を迎えたのである。今後いつまで余生が与えられるかわからないが、何としてもこれは余分の寿命であると思い、出来るだけ人のため、世のためにさゝげたい心で一ぱいである。(中略) 山本天文台については、創立以来満 15 年以上を経たが、何しろこの 15 年間に大戦争と、戦後の混乱期を経過したので、創立当初計画したことが 1/3 も達しられてゐない。そして、年齢と共に体力のみが徒らに衰えて行くのを感じる。しかしながらもはや戦後の混乱もほゞ収まり、国内国外との学問上の友好関係もほゞ戦前の通り、或はそれ以上に回復した。この機に老馬に鞭打って年来の理想の実現のため一奮発して見たい。今年は大に観測を励みたいと思う。」(*13)

ここで山本一清が「1/3 も達しられてゐない」としている「創立当初計画したこと」とは何であろうか。それは位置天文学を中心とした天文学の深化と天文普及活動だったかもしれない。山本一清が現在の東亜天文学会の前身である「天文同好会」を立ち上げたのは 1920(大正 9)年だが、この時期、関西では 1921(大正 10)年に大津市の藤井天文台のドームが竣工(*7)、1928(昭和 3)年には神戸の射場天体観測所が完成(*14)し、山本一清はそれらと懇意にして、或いは天文学普及の基地としての期待もあったかと思われる。だが、そうした役割はこの 2 天文台設備は結局果たせなかったと見られる。理想に近づいたのは 1926 年(大正 15 年)に篤志家の資金援助を得て完成した倉敷天文台のみであった。このようなフィロソフィとしての天文学追求と一般普及に向けた各地での天文台建設とその活用のアイディアは、その後の山本自身の転変や社会動向の変遷の中に、実現しないまま、理想の中に眠っていたのである。このような山本一清自身の理想が、或いはこの三五教との出会いで、実現に近づくとされたのかもしれない。

ただ、一方で、山本は同時代の岐阜金華山天文台の運営の困難さも十分に認識していたはずである。同天文台は、山本一清に師事していた坂井義雄が公開型天文台として 1950 年(昭和 25 年)に着手し、翌 1951 年(昭和 26 年)にオープニングを迎えた。ただ、任意団体と当時の岐阜市長との間のあいまいな合意が基になっていたことから、1958 年(昭和 33 年)には施設の市への返還が迫られ、天文台の閉鎖に追い込まれた。坂井義雄は香貫山天文台開設に当たっても設計等で大きな役割を果たしていて、岐阜金華山天文台の折衝の傍ら、山本一清の下に通っている。山本一清は、この坂井義雄と岐阜金華山天文台の運営状況を十分に理解していたはずである。

推察にとどまらざるを得ないが、このような山本の理想ともいえる公開型天文台運営に際して、山本一清はそれまでの経験を踏まえて、①人材の確保と育成②それと運営を支える資金的基盤③良好な地元との関係④天文台と観測機器の確保⑤研究機関としての基盤形成、を考えていたことと思われる。それが三五教の下で実現可能と判断されたのであろう。

このために、暦算局をまずは設置(1951 年)するとともに、新進の天文学者として長谷川一郎と古川麒一郎をそこに配し、更に、坂井義雄に建設と運営をゆだね、若い観測者とし

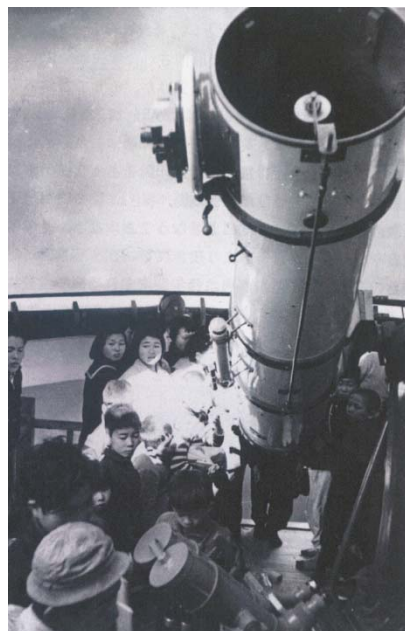


写真 6. 香貫山天文台内の望遠鏡

て柴田宸一郎、関勉、藪保男などにも参加を呼び掛けた。残念ながら、この呼びかけがすべては奏功しなかったことは、山本一清の理想には共鳴しつつも現実の生活とのほざまで各人が揺れ動いたことによると思われる。山本一清としては具体性を伴って良く考慮された経済基盤の確保に基づく人材配置案と思われたが、やはり現実生活とのかい離までは尽くせなかったことが山本一清の限界であった。それを補うための人材の育成にも力を注ぐことになるが、その発展形式が中野地学専門学校となった。だが、それは山本一清が三五教と袂を分かつた後のことだ。当座は、「教生」として暦算局で、また坂井とともに観測に従うことになる。しかし、結局は、少なくとも沼津の香貫山天文台、そして多くの三五教系天文台は、岐阜金華山天文台の轍を踏むことになる。山本一清が、後に三五教から離れたのは、この限界を感じた時にいち早く関係者の束縛を開放させなければならないという使命感もあったものと推察する。

長谷川一郎はのちに回顧して次のように語っている。『天文学と人間と、どちらを大事にするかということになれば、それは人だ』といつか言われたことと、私にむかって、『アナナイ教と協力するのは、これは山本だからするのであって、他の人なら誰も協力しないだろう』といわれたことは、(山本一清)先生の本質の一端をはっきりものがたるお言葉であろう。 / それはともかくとして、先生は本当に星に、天文学に親しまれた人であったと思う。そして人間や人間社会の根幹には天文学があるのだとのお考えは、一般にはなかなか受入れられていないように思われるが、先生の根幹を示す思想であったのではないかとと思われる。これは、しかし考えてみれば当然の考えであって、誰でも観念的には納得しうるものであろうが、特に我が日本では、この理想からは程遠いのが実情である。先生はいつもこのことに歯がゆい思いをされていたと思う。とくに欧米社会の実際と比べて、あまりにも違いの大きいことに、極端な云い方が許されるならば半ば絶望の観さえ、いだかれていたのではないだろうか。先生の日頃の天文活動や、アナナイ教とのかかわりあい、このことをふまえた上でなければ、到底、我々には理解できないように思えるのである。』(*15)

§ 10. 三五教系列天文台の目指した役割

三五教は沼津の香貫山天文台の建設に続いて、各地に同様な施設を続けて建設する。同教が設立した天文台を月光天文台の資料(*6)により一覧すると表4のようになる。

立て続けに同様施設が各地に建設されていたことがわかる。この内確かに山本一清が関係していたと伝えられているのは、天文暦算局と中央天文台(香貫山天文台)と東北天文台である。これら立地がどのように選択されてかは不詳であるが、恐らくは信者との兼ね合いであろうか。なお、三五教自体は、天文関係を扱う部門として傘下に国際天文協会(1957.4～1965.3)を設立し、天文台はこの組織下で運営されていく。国際天文協会は後に組織変更などで、財団法人国際文化交友会(1961.1～2011.3)を経て、現在は公益財団法人国際文化交友会(2011.4～)となっている。

三五教の教義がややわかりにくいことと併せて、このような、かなり派手な天文台建設への傾倒は、なおさらにこの宗教に対する理解を難しくしている。「天変地異が告げる社会変革への誘い」も見え隠れしている。このために、前述のデモンストレーション用具としての天文台と宇宙の研究、さらにそれを支える普及活動が要請され、加えて、天文台には「日本」(神道)と結びついた様式が要請されたのかもしれない。ただ、教義の形式を整えるに当たっては、おそらくは山本一清との共同作業が必要になったものと思われるのである。権威を現世の学術に求める必要性は宗教側にもあったのである。

ところで、直木賞作家である佐藤愛子(1923-)の作品に「あなない盛衰記」という作品がある。福島県二本松市に突如わきおこった新興宗教による天文台建設に絡んだ話しを、ややコミカルに扱った作品だ。

この事実に基づいたと見られるフィクションとして扱われているのが、「三五教」の福島県二本松天文台の建設から運営に関わる経緯である。本論で取り上げている沼津の香貫山

表 4. 三五教系天文台リスト

名称	場所	設立年	撤去年	建物	望遠鏡その他
天文暦算局	静岡県清水市	1957. 1. 5		木造モルタル二階	11cm屈*4
中央天文台*1	静岡県沼津市	1957. 9. 21	1973. 6. 30	回転天守閣木造三階	46cm反赤→16cm屈赤
月光天文台	静岡県函南町	1975. 3. 22		鉄筋コンクリート四階ドーム	50cm反赤、20cm屈赤
西部天文台*2	福岡県筑後市	1957. 11. 25	1992. 3	回転天守閣鉄筋コンクリート三階	20cm反→16cm屈赤→20cm屈赤
四国三縄天文台*3	徳島県池田町	1958	1959	木造二階	20cm反赤
眉山天文台	徳島県徳島市	1958. 3. 19	1968	鉄筋コンクリート三階ドーム	20cm反赤→16cm屈赤
奥州天文台	福島県二本松市	1958. 4. 25	1991	回転天守閣木造三階	16cm屈赤
国治天文台	愛知県岡崎市	1958. 9. 14	2009. 12	回転天守閣木造三階	11cm屈→16cm屈赤
濃尾天文台	岐阜県多治見市	1958. 11. 12	1972. 3	木造三階ドーム	20cm屈赤
東北天文台	岩手県北上市	1959. 2. 21	1996. 3	鉄筋コンクリート三階ドーム	21cm反赤、16cm屈赤
肥之国天文台	熊本県山鹿市	1960. 9. 30	1983. 6	回転天守閣木造三階	16cm屈赤
信濃天文台	長野県岡谷市	1963. 10. 1		鉄筋コンクリート三階ドーム	22cm屈赤

*1 1958. 1月 月光天文台に改称 *2 1958. 1九州天文台に改称 *3 眉山天文台に移設 *4 国治へ移動

出典：五味政美、「(三五教)天文施設と望遠鏡」(第 5 回天文台アーカイブプロジェクト報告会)、2014.8.6



写真 7. 1966 年頃の香貫山天文台 背景の市街地の向こうは駿河湾

天文台建設に係わる騒動と非常によく似た点が多い。二本松天文台のオープンが表 4「三五教系天文台リスト」からは 1958 年(昭和 33 年)4 月 25 日となっているところ、フィクションでは同 4 月 25 日が完成予定日となっていて、符合する。しかし、同天文台に据え付けられた望遠鏡について一致しない。フィクションでは「天文研究の大家、ジョナサン・カバレーロ氏の傑作」といわれた「口径三十センチ」の望遠鏡となっている。「ジョナサン・カバレーロ」の望遠鏡とは寡聞にして知らない。似たような機器名として沼津香貫山天文台に、暫定的に山本一清が設置したカルバー 46cm があるが、これは「ジョージ・カルヴァア氏の傑作たる口径 46 センチの反射赤道儀式の望遠鏡」(*8)である。

「あなない盛衰記」には沼津香貫山天文台での事象と似たようなこととして、建設までの期間がごく短い、建設には信者による労働奉仕が大きく寄与、公有地の土地貸借、樹木伐採等の違法処置、軽食を提供する休息所の設置、宗教団体が用意したとされる 1 億 5 千万円の資金、建設候補地がほかにもあることによる自治体への誘致活動、天文まつりなどが掲載されている。もちろん、フィクション上の要請からの現地二本松にとどまらない資料背景なども考えられるため、一概には言えないものの、多くの類似点があることは確かだ。なによりも語られている天守閣構造はまったく沼津と同じである。

ところが、この「あなない盛衰記」に関しても、三五教の教義は明確には語られていない。それは二本松という地方性をフィクションの一つの柱としているためとも考えられるが、恐らくは、佐藤愛子自身が十分に咀嚼できる教義として把握できなかったためとも見

られる。それでもその根幹の考え方のようなものが以下のように、フィクション中の後藤田という信者が天文台の説明をする時の言葉としてまとまって示されている。「天文つう言葉は天の文と書きます。天文とはすなわち、天体の運行を見て天はこの地上に何を教えていんのかを学ぶことであります。ただあれが北斗七星だ、あれがアンドロメダだと空を見て喜んでいただけでは困ります。(中略)また果物をちぎるにしても、満月にちぎったか、そうでねえ時にちぎったかで味にも大きく関係するんであります。このように天体の運行を見つめて我々が生きることには大きな意味があります。天の星はただ漫然と光っているわけではねえんであります。大宇宙の自然の運行。いったい、この力は何によってなされているのでしょうか!我があなない教は宇宙の大霊に感謝しそれを祀って、この神を大御親とする全人類の大家族を結成して相融合せんがために、この天文台を建てたんであります……………」(*16)

三五教中野開祖は「星は宇宙の循環順律のことを教えてくれるものであります。 / 天体に異変のあることを天変と呼び、人の思想の変わることを地変といいます。かような所から考えると一つの時期を経過することによって如何に宇宙というものが、大きなものであ



写真 8. 三五教二本松市奥州天文台

り人間の精神力が大きくなれば、その眼で宇宙を眺めてみればより一層に宇宙もそれだけ大きくなっていることに驚異できるはずです。」(*17)と語っている。これが「あなない盛衰記」の中で語られている宗教・宇宙観のベースとなったと見られる。

フィクション「あなない盛衰記」に登場する事項で注目されるのは、天文台関係者の生活が語られている点である。沼津香貫山天文台関係資料の中でも、かなり重要なポイントとなる点であるにもかかわらず、これに関する資料や証言は集められていない。「あなない盛衰記」のフィクション性を踏まえても「さもありなん」と思われるのは、「本部から送って来る補助金は、天文台に住んでいる人間の頭数に等分に分けると、食べるだけでも十分でないという額になる」(*18)という文章だ。

§ 11. 香貫山天文台とは何だったのか

現在、東亜天文学会と三五教系天文台とは直接的な関係を有していない。それは 1959(昭和 34)年 1 月の山本一清の 69 歳での逝去によって、閉じられたのかもしれない。なお、三五教は山本一清の逝去に際して丁重な教団としての葬儀を実施している。

まだ貧しさの残る中で、将来に対する希望は輝いていて、各方面で人が新たな展望を求めている時代であった。そんな中で、三五教は、山本一清と出会ったことにより、その教義と信仰体系の確立を行うことができ、一方、山本一清は、「研究と普及のための協力」と『『思想』の学』としての天文学を目ざした(黎明新聞コラム「天文と思想」、1957.2.26)。当座の豊かな資金力を持つと見られた宗教がこれらの活動をサポートする大きな力と見なされ、天文台ネットワーク構想が着手された。

沼津という地方都市も、宗教という懸念は感じつつも、いわば自らが大きな資金的人材的支出を伴わずに、文化面の底上げができるものと期待したのである。おりしも国際地球観測年という周知された科学イベントや、分かり易い技術進歩である人工衛星打上げなども沼津の背中を押すことにプラスに作用したのだ。

だが、香貫山天文台竣工後の天文台を中心とした普及活動がどのように行われたのかは、惜しむらくは、現地報道からもよく聞こえてこない。このあたりが、山本一清の社会的運営技術の限界であったのかもしれない。山本一清自身の体力の限界もあったのかもしれない。わかり易い天文学の普及が標榜されつつも、香貫山天文台が、研究のためのウェイトを高めるとともに、おそらく人材難も作用して、普及に力が入らなかったのかもしれないし、

普及のためのテクニックも構築にはあまりに力と時間がなかったとも見られる。

三者それぞれが win-win-win の構築期を経て、やがて事態は変わる。山本一清自身は、とうとう 1958 年(昭和 33 年)11 月(この年に関しては 1958 年としつつも、文章から 1957 年ともみられる資料(*9)もある)に三五教と静かに袂を分かつことになる。この間の事情については山本一清自身の明確な発言などは、現時点で確認できていない。まだ当時の関係者の証言によってもなかなか真意まではたどり着けていない。だが、それを彷彿とさせるような記録は坂井義雄の次のような私信に垣間見ることできる。

「あなない退去の現況当時は、あっさりと不詳としておりますが、(中略)所詮は『科学と宗教とは同床異夢ということであろうか』と結んでおきましたが、(中略)開祖の意志としておりますが、教団幹部の世間知らずとからまねいて来た結末であります。三五開祖中野師と Dr.山本の個人的には美しいロマンを私には感得させられます。」(*19)坂井義雄は、三五教がこの時点で抱えていた資金力の問題も示唆している。

地方自治体の行政と宗教の関係では 1965(昭和 40)年 1 月の地鎮祭への市からの支出が問われることとなる三重県津市での、後に「津地鎮祭訴訟」と呼ばれる画期的な例が生じることになる。更に、沼津市では 1961 (昭和 36 年)に静岡県から提示された「沼津、三島の石油コンビナート計画」から、第一次、第二次の石油コンビナート反対運動が発生した。天文台建設期の鉄道計画や商工業の大手企業誘致などに沸いていた沼津市も、更に揺れる時代に突入したのである。

三五教系天文台も建設からしばらくの間、公共天文台の拡充体制が整うまでの間、確かに地方にあってそれなりの天文普及の役割をはたした。そしてそこから輩出された人材も確かに存在するのである。だが、恐らくは資金面との兼ね合いから、その多くは閉鎖の止む無きに至った。

1951(昭和 26)年、「児童厚生施設設置運営要領」が児童福祉法の下に制定された。1956(昭和 31)年には「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」が公布されている。それらに基づき建設された各地の児童会館や教育センターの中には公共天文台を有したものも多く見られた。又、1953(昭和 28)年に制定された「理科教育振興法」では、その後の学校教育の中で具えることが推奨されるものとして天体望遠鏡などが指定されるとともに、理振法準拠の天体望遠鏡も市場に出回ったのである。これらにより昭和 30 年代から各地で多くの公共天文台や学校天文台が誕生した。三五教天文台の全国展開の直後であり、これが三五教天文台の躓きとなったとも思える。更に時代が下ると、1988(昭和 63)年の「ふるさと創生基金」も天文台やプラネタリウム建設の契機となったのである。

残念ながら、山本一清もこの流れに乗ることができなかった。ホンの少し時代に先行しすぎた感もある。だが、その後の数多くの公共天文台では、多くの山本一清の弟子たちが運営に携わることになった。山本一清の目指したものはこうして実現したと見るべきであろうか。

現在、当時威容を誇った口径 46cm のカルバー望遠鏡は、京都大学に復元され、今後は産業遺産的な保管も目指されている。

沼津香貫山の天文台跡は整地し直されている。そしてそこには展望台が新たに建設され、ピラーの後さえ残っていない。柱状節理が露出していた山頂付近の斜面も今は擁壁処理されているが、天文台へ上る石垣や、天文台内の道路は残されている。沼津の地では何が残されたのか、遺構は問いかけている。

§ 12. 今後の調査の方向

なによりも、まだ独りよがりの調査である。うっすらと香貫山天文台の成り立ちや経過が見えてきたものの、その動向や意義については、まだ闇の中に眠っていると言ってよい。

このささやかな調査を基に、現存している関係者にも伺いながら、もう少し形あるもの

に仕上げていきいてと考える。また、生駒山天文台、計算機に関する三五教との条件、宇宙旅行協会との関係、三五教系列の地学専門学校との関係など、まだ手が及んでいない。更に、かつて、静岡県旧清水市日本平にあった富士観センターには五藤製の 30 cm 屈折望遠鏡が地上望遠鏡として設置されていた(1960 年頃導入された由)。沼津での設置が予定されていた 30 cm 屈折赤道儀(五藤光学製)との関係が微妙である。沼津には、結局、30 cm は設置されることがなかったのも、或いは、契約流れとなったものが最終的に日本平に架台なくして運ばれたのかもしれない。まだまだ調べるべきことは多い。これからである。ご意見・ご教示を頂戴したい。

あとがき

本論考はもともと京都大学天文台アーカイブプロジェクトの山本一清論のために沼津香貫山天文台と山本一清の関係を調査し始めたものである。これを 2015 年 8 月に開催された同プロジェクト報告会で発表し、そこで寄せられたご意見ご指摘に基づき書き改めた。

また、静岡県沼津市の沼津史談会で勾坂副会長に添削いただいたところ、案に反して好評をいただき、同会での論考として「沼津香貫山天文台と山本一清」の題で用いている。(2015.11)。

筆者が撮影した 2014 年 10 月現在の香貫山天文台跡の状況を以下に示す。



写真 9. 山頂付近の天文台への階段と石垣



写真 10. 西側から見た石垣と跡地
アンテナの建つ展望台南側が、おそらく、ピラーの跡地(この内部にも残っていない)



写真 11. 展望台横の更地には石があつた。
天文台建物の遺構と見られる。



写真 12. 欄干の赤い橋、天文台当時の遺構

References

- (*1) 島田裕巳監修、「現代につぼん新宗教百科」、柏書房刊、2011.9 pp248-249
- (*2) 2013 年、筆者による長谷川一郎氏インタビュー

- (*3) 井上順孝、「宗教最新版」、(株)ナツメ社刊、2011.5 p240
- (*4) 富田良雄、「山本一清と W.M.ヴォーリズ」、第 5 回天文台アーカイブプロジェクト報告会配布資料、2014.8.6
- (*5) 東亜天文学会「天界」第 390 号(1957.10)
- (*6) 五味政美、「(三五教系天文台の)天文施設と望遠鏡」、第 5 回天文台アーカイブプロジェクト報告会配布資料、2014.8
- (*7) 富田良雄、「藤井天文台探訪記」、第 5 回天文台アーカイブプロジェクト報告会配布資料、2014.8
- (*8) 山本一清、「三五系・中央天文台」、斐太彦天文處「星と人」第 15 号、1981、pp13-15
- (*9) 坂井義雄、「続・中央天文台余話」、斐太彦天文處「星と人」第 16 号、1983.6、pp6-10
- (*10) 山本一清、東亜天文学会「天界」1957 年 10 月号、No390、p223
- (*11) 2014 年、筆者による五味政美氏インタビュー
- (*12) 五味政美、「(三五教系天文台の)天文施設と望遠鏡」写真集、第 5 回天文台アーカイブプロジェクト報告会配布資料、2014.8
- (*13) 東亜天文学会「星と空」第 24 号、1956.1
- (*14) 中桐正夫、「射場天体観測所から東京天文台に寄贈された機器などの追加調査」、平成 25 年度「黎明期日本天文学史」研究会集録、2014.2、p62
- (*15) 長谷川一郎、「山本先生と天文」、斐太彦天文處「星と人」第 15 号、1981、pp18-19
- (*16) 佐藤愛子、「あなない盛衰記」、光文社刊、1975.7、pp 196-197
- (*17) 山本一清、「三五系・中央天文台」、斐太彦天文處「星と人」第 15 号、1981、p13
- (*18) 佐藤愛子、「あなない盛衰記」、光文社刊、1975.7、p 155
- (*19) 坂井義雄氏発信の某氏宛て私信、1981.9.26 消印

§ 写真出典

- 写真 1. 五味政美、第 5 回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録、2014.8.6
 - 写真 4. 東亜天文学会「天界」第 390 号、表紙写真
 - 写真 5. 富田良雄、第 5 回天文台アーカイブプロジェクト報告会配布資料、2014.8.6
 - 写真 6. 五味政美、第 5 回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録、2014.8.6
 - 写真 7. 五味政美、第 5 回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録、2014.8.6
 - 写真 8. 五味政美、第 5 回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録、2014.8.6
 - 写真 13 富田良雄、第 5 回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録、2014.8.6
- それ以外の写真は筆者による



写真 13 参考；かつて沼津香貫山天文台にあった 46cm 反射赤道儀
(カルバー46 センチ)
2014 年、京都大学での復元展示



写真 14 参考；山本天文台を訪ねた筆者たち
1969(昭和 44)年 8 月 向かって右が当時高校 2 年生の筆者
TANAKAMI OBSERVATORY、山本天文台そして山本一清の表札も見える。
山本天文台の門にて